平成25年度　第3回東松島市
復興まちづくり計画市民委員会

復興事業の進捗状況報告と意見交換　まとめ

2013.9.17

	①東日本大震災被災体験伝承事業	②心と身体の健康支援事業 （被災市民の心のケア、健康支援）	③観光資源の再構築と魅力づくり
質問 →回答	●資料はいつまで集めるのか？ →体験談は今年度で終了し、その他は継続的に集めていく。 ●対象者は？ →大曲浜が多い。40～50代の女性が多い。 ●修学旅行で来る生徒への説明は誰がどのように行うのか？ →学校の先生と打合せをして図書館職員4名で対応している。 ●IT機器ばかりでは使えない人もいるのではないか？ →紙媒体でも集めている。落ち着けば紙での対応も考えている。 ●iPadは何台あるのか？ →現在10台あり、操作は、慣れないと難しい面もある。修学旅行対応では教材として使用した。 ●観光地ではないので困る面もあるのだが？ →多くの人が知ることも良いので本質的な難しい問題である。	●相談の男女比、年齢構成は？ →女性が多い、DVの件数も増えている。 ●市民が詳しく話を聞きたい場合はどうすればよいか？ →毎月1回個別相談を行っている。福祉課の相談員に電話してほしい。 ●男性のケア（アルコールなど）は難しいと思うが地域でできることはあるか？ →男塾教室を東サポセンでモデル開催している。手法ややり方を今後検討していきたい。 ●災害時から現在まで対応している保健師の数は増えているのか？体制は維持できているのか？	●誘客について、市と繋がりのあったボランティアを活用してはどうか？ →PRの重点地域として、協力いただいている自治体のイベントに参加し、積極的なPR活動を行なっている。また、ボランティア以外にも、復興支援の応援職員として県外の自治体から多くの職員が当市に派遣されており、PR派遣元の地域住民へのPR活動にも協力いただいている。 ●何を目玉にするのか？ →ボランティア等が再度来た時に体験型で楽しんでもらえるようにしたい。 ●避難道路の先はどこになるのか？ →野蒜地区については、高台となるが、移動経路中にも一時避難先としての避難ビル等が配置できるのか、関係機関との調整が必要となる。 ●宮戸の民宿の再建はどうなるのか？ →高台移転とあわせ、整備されていくようになると思われるが、まずは生活の再建が優先されている。
感想 ・ 現状認識	●実際の体験、証言なのでリアリティがある。 ●まとめるのは素晴らしい。 ●後世に残す取組みは大事だ。 ●修学旅行に活用は大変良い。北海道の中学生が支援を考えるワークショップの材料に活用していた。 ●見るのはつらいが話せば楽になる部分もある。 →心のケアにつながることもある。PTSD等映像を見たくない場合もあり、十人十色である。 ●安置所など尊厳を傷つけるようなことは許されない。 →シンプルに考えて、最初から提供してもらわないこともある。	●環境の変化による鬱（うつ）などこれからが大変だと思う。 →よい変化であっても心に負担はかかる。 ●回復力は皆さん持っているが時間がかかっている。 ●在宅の被災者ケアは難しいとは思うが一軒ずつ訪問するしか方法が無いのではないか。 ●行政としてやれることはやっていると思う。	●これと言えば東松島！があると良い。 →水曜日の午後は飛行訓練が組まれているので、ブルーを見るなら水曜日の午後とPRしている。 ●滞在・民宿施設が40軒→5軒になった。 ●パンフレットで東松島の知名度向上を図っている。 ●嵯峨渓遊覧船が10月からスタートする。 ●矢本パーキングの利用客が被災前の2倍以上になった。 ●観光情報センターを高台整備で検討している。
課題 ・ 改善要望	●図書館ではなく、別部門で行った方が良いのではないか？ →図書館業務とは異なる面もある。復興計画で位置づけられているので予算の確保（750万円）は問題なかった。 ●活用まで行うと図書館だけではできない。 ●集めるだけ集めて後で資料整理が必要なのでは？ →加工については市で行う必要がある。 →資料収集と編集のスタンスが大事である。 ●資料の更新をどうするのかも問題である。 ●他自治体と比べて一般資料が少ない。図書館は資料集めも行ってほしい。 ●様々な方法で各世代に対応できるようにしてほしい。市民の頭の中のものを資料化する必要がある。 ●図書館に行かない人にとっては、知らない事が多い。 →端末利用状況は仙台等の遠方が多い。 →積極的に対外的な広報を行っている。津波記録などはイベント等にも活用している →外への発信が大事。マスメディアと違う地元ならではの表現が必要。テレビでは時間で切られるのでなるべく生の体験が伝わるようにしている。 ●行政との擦り合わせが大変なのではないか。 →神戸など他自治体でも同様の事例がある。 ●スタンスを明確にして後世に残せるような遠い未来に向かっていってほしい。	●年配の方が特に相談を遠慮しているので踏み込む仕組みがあるとよい。 ●内部の精査に深みがないといけない。地域への負担が大きいのではないか。 →回復の過程は人それぞれであり、相談を受け付けている。 ●楽しく参加できる教室などがあればよい。 ●支える側の研修も必要である。	●津波被害を考慮した安全対策が必要だ。安心安全のもとに観光を進めていきたい。 ●避難道など安心安全を確保の見通しがたつスケジュール感を知らせる必要がある。 ●観光資源の使い方の見直しが必要である。 →コンテンツを行政だけでなく市民と出し合いたい。 ●お土産の品数が少ない。海苔、牡蠣、6次産業品など。 →自治体間で連携した商品開発を検討している。 ●6次産業品を市でもっとバックアップしてほしい。 →官民で協力する必要がある。 ●宿泊場所がない。ボランティア同窓会では社協に泊まった。大きい宿泊施設が宮戸にほしい。 ●避難のために分かりやすい大きな施設がほしい。 ●グルーンツーリズムの活用をすべき。 ●自然の家を誘致してほしい。 ●松島マラソンのような大きなイベントがほしい。 ●写真コンテストを実施してほしい。 ●プレジャーボートを活用すべき。